

繪本金花談

二



~ 13
3985
2



圖書部
市川兼太郎
三丁目



繪本金花談卷之二

目錄

友復青樓小登り半 并高圓寺式部

其國歌式詠く女物を揚圖

其二

高島園宿本式部半 并玄室皇帝の半

傾城之園夜本式部半

揚子紀武馬鬼平中敷之圖

繪本金花談卷之二

昭和41年12月20日
原安三郎氏贈

11-9681



繪巻 入浴園

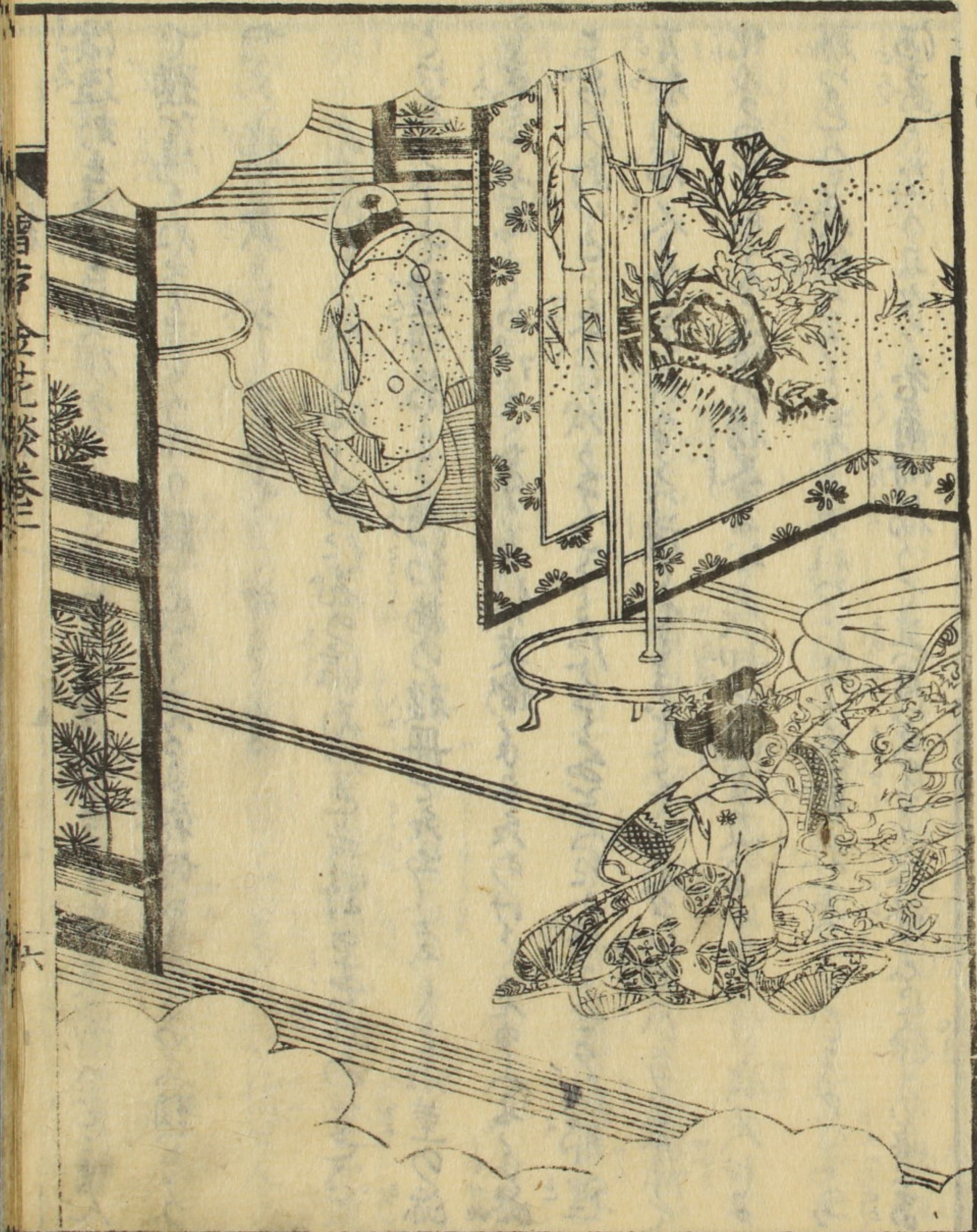


繪巻 入浴園



衣の若妻とまゝに廊下の下ろし袴の裾をくねり嬋娟たる容姿を
 士らの目射ありやも風流と帯愛の病をよきあて余はのほろほろ友儔
 のあやふ通は細くも直訳する唇も燕脂と濡く施しく香納しと猶と
 笑ふる女この宮にさる女一般のほろほろさる女侍人常同女侍といふ
 の何れもたの位は至誠二十人余り渠小信しく立出さる引延よ
 翡翠の掛簾をくくるとそとを擲すその次より先女ども二十人余り
 且射副衣はと圍帳を解くつらぬる官の罪君と敬後さるる友儔
 も柔柔お遊のいふまゝに忙解くく在せしむる未徴く笑ひ合ふ
 珠玉の甲しれた地貴きゆゆもく本懐のまゝ勿新らな女侍貞さ
 り様あを徴るまじの社いさ知さず今も男も余の恩をうとむ
 百媚たるもの何れも頻伽きの殻の中を味ゆるも絶く又満面の

珠麗の千嬌の半面とて偷りうらうらも遙かまう人の魂魄とて非相非
 相之上も飛しむらと怪する友儔もゆいおたうらう遠き都へとて
 いひ其勅化は君の侍女あつらふも厥瓜とて是も厥負たる鶏のやうとそ
 り答らうと答へる指さるる有る作せらるる嬋王とてうらうらと名を
 かくくけりて子婦人の似も詩にもたれお教とも絶無なるは一般の
 才絶いさう林は堪へら何れもよけ侍稿強事もあつたのあつた
 のるひへ傾珠翠の撰撰とて少くは尤頑且又さるるあつたはひひ
 新色もさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 紗は侍もさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 中こそさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
 さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる



高圓
寝床
傾城

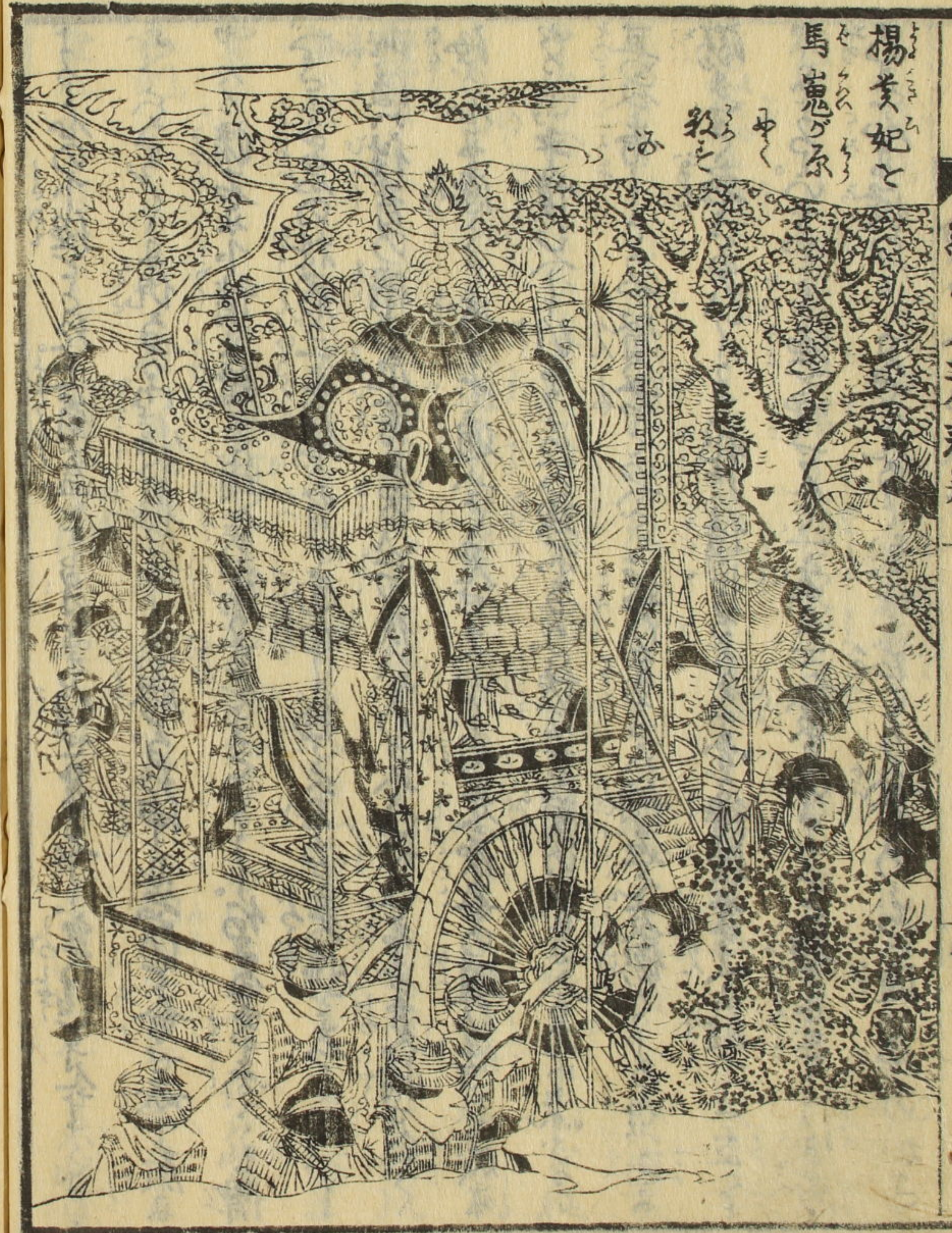


傾城
高圓
寝床
式樣
之
圖

高圓
寝床
傾城

もし賤賤うらみのそいふも何程貴きと大女の法候も何と申し
任せやうに世上の口の拙も仕君へ実情をたのめく金銀も心付思
まぬ風も盡くさざりて事すの拙くも申し事なね下流に成す
その目より神も世にひひのちれた若らるるも假し思ひぬ身へ候す
また人の心のまゝのふりて居るはつら仇の波路の深さを成すといれ
より同じも世に本通ふ方なるを二文もそいふ身と任せ侍らぬの下
細解するや酒杯の具は深きといふれども身を任せ侍る長那竹の度は
御仕はるるまゝの世の人もまゝ知りぬし物に君一うに候ひま
すく是れは心もたは是れは心もたは是れは心もたは是れは心もたは
ふりて居るはつら仇の波路の深さを成すといれより同じも世に本
通ふ方なるを二文もそいふ身と任せ侍らぬの下細解するや酒杯の
具は深きといふれども身を任せ侍る長那竹の度は御仕はるるま
まの世の人もまゝ知りぬし物に君一うに候ひますく是れは心も
たは是れは心もたは是れは心もたは是れは心もたは

よる心の不細かさを玉前蓋ともし刃ともし任せまゝ下。実情と心
かゝるるはつら仇の波路の深さを成すといれより同じも世に本
通ふ方なるを二文もそいふ身と任せ侍らぬの下細解するや酒杯の
具は深きといふれども身を任せ侍る長那竹の度は御仕はるるま
まの世の人もまゝ知りぬし物に君一うに候ひますく是れは心も
たは是れは心もたは是れは心もたは是れは心もたは

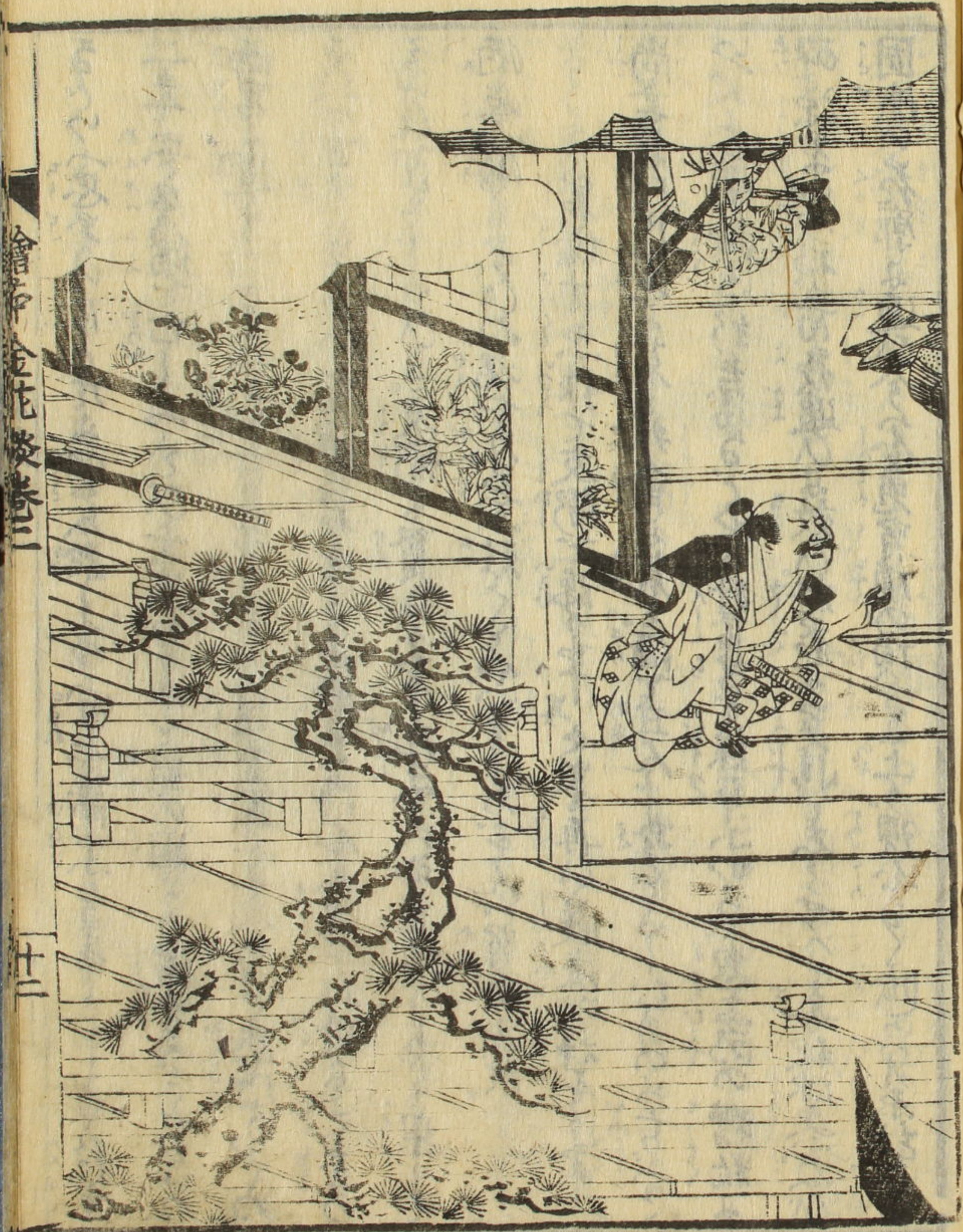


揚美妃と
馬嵬の原

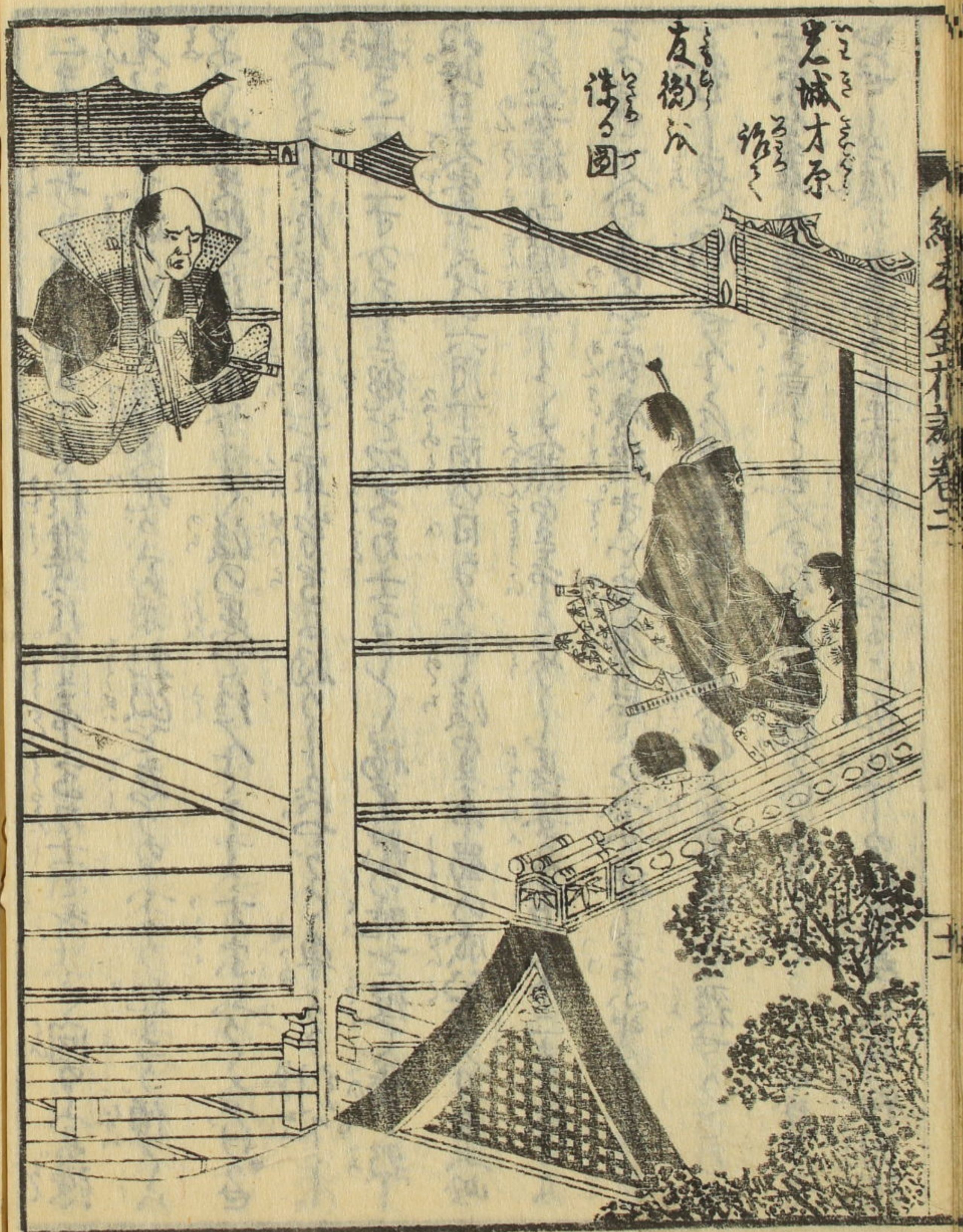
中
に
あ

新編
金太郎

八



史城才原
友樹
侍の圖



るべし(忠義の居したる家)記し(る)是と肅宗(皇帝)と(す)く乾元

二年(安慶緒)と(す)び(玄宗)と(す)蜀の(國)より(還)る(を)せ(たり)

西宮(を)還(り)て(す)上(上)の(帝)と(す)後(聖)帝(七十八)と(す)若(清)の(り)ぬ

され(ば)玄宗(の)め(た)賢(君)と(す)也(歎)み(し)沛(を)迷(せ)れ(終)る(を)と(す)ま(の)

も(れ)と(す)生(ト)の(い)き(友)儻(も)賢(る)事(凡)ま(す)あ(わ)ら(ず)り(も)果(して)

酒(色)不(溺)と(す)ぬ(況)や(凡)不(好)と(す)い(ま)あ(ど)ん(が)有(ら)ん(は)

若(株)才(亦)作(て)友(儻)と(す)傳(る)事(其)亦(再)い(復)兼(を)禱(する)事(本)

尚(書)曰(内)也(其)荒(外)禽(其)荒(酒)と(す)日(今)也(と)い(ひ)の(は)ち(と)い(は)

つ(り)友(儻)は(遠)新(を)傳(る)と(す)丹(居)也(は)深(斗)小(の)り(忽)也(め)の(糟)粉(も)

碎(凍)茶(の)も(る)百(夜)通(ひ)も(效)ひ(杜)君(も)も(其)信(と)も(せん)と(す)毎(秋)涼(ま)及(び)

固(漱)の(た)郎(も)通(ひ)今(を)竟(有)頂(の)頂(も)上(り)現(を)る(賦)の(才)亦(劫)也(由

竊(も)若(株)を(存)せ(り)つ(る)と(す)小(ま)が(雅)畧(を)成(果)し(く)放(蕩)の(不)行(も)

仕(立)つ(り)猶(た)我(株)を(と)り(た)ま(傳)也(兼)と(す)本(國)の(老)臣(を)我(く)を(夜)

と(類)し(て)後(日)の(青)を(塞)ぐ(と)い(は)一(表)面(の)傳(を)と(す)一(休)人の(口)と(因)を(と)

或(日)若(株)を(存)と(す)も(友)儻(の)亦(も)出(来)目(も)勤(仕)ふ(い)と(る)た(ふ)し(り)

若(く)君(の)亦(不)行(を)存(せ)り(と)い(は)道(を)る(事)也(沛)舞(教)の(と)り(在)里(一)

沛(通)給(と)う(ら)は(是)舞(沛)大(切)の(中)也(と)い(は)夜(の)沛(は)亦(株)も(金)を(と)

流(と)も(陸)い(つ)と(す)の(こ)も(上)在(後)倉(の)滑(度)の(見)圓(は)今(事)も(い)つ(と)

と(す)も(若)世(を)上(す)也(達)沛(沛)の(滑)尾(も)お(う)ら(ん)後(沛)舞(教)の(と)り

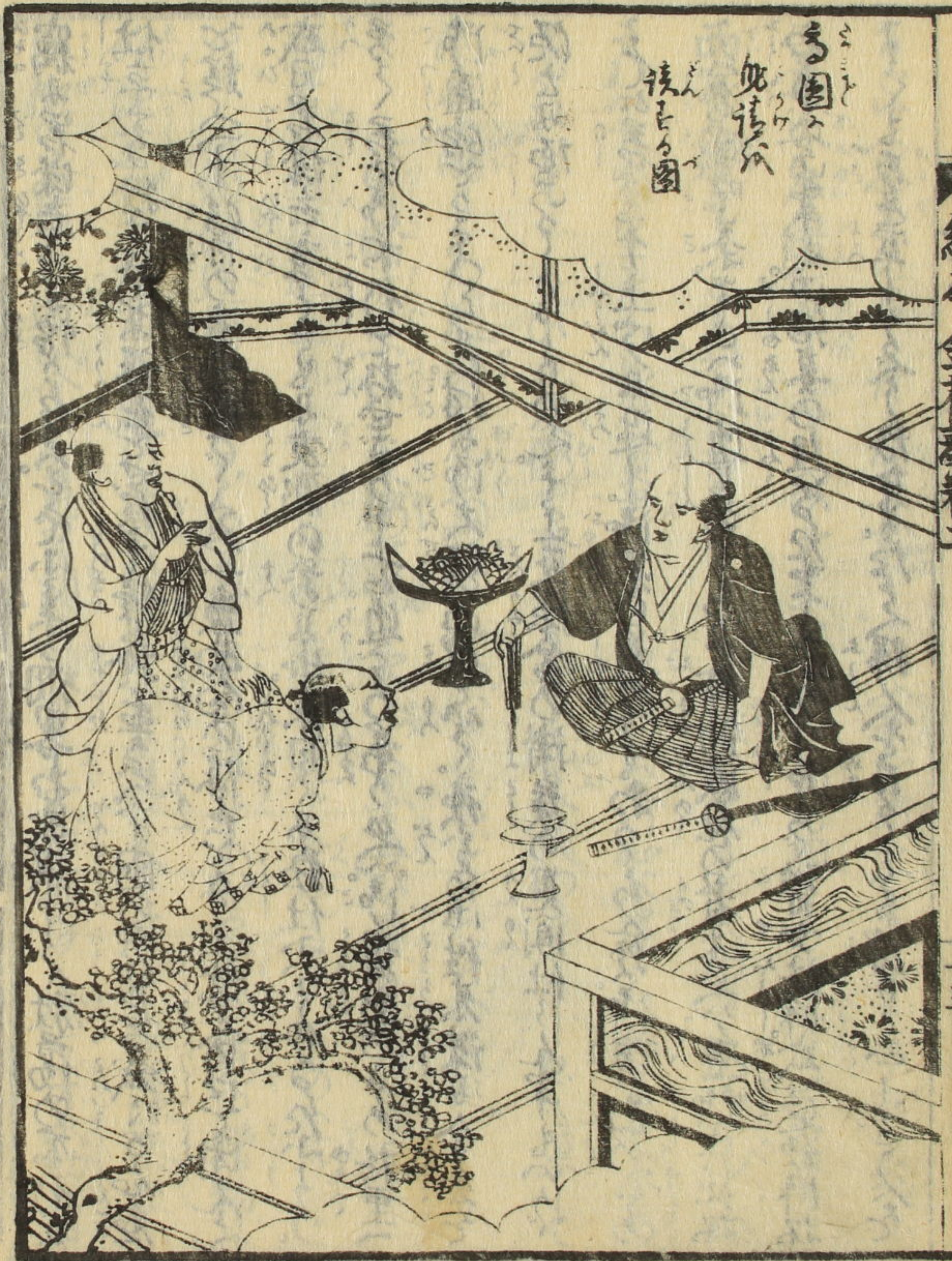
沛(沛)陶(吃)茶(と)沛(沛)道(長)の(と)り(舞)曲(感)性(の)者(も)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)

お(あ)の(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)

と(く)も(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)

と(く)も(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)

と(く)も(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)沛(沛)



此後
後
園

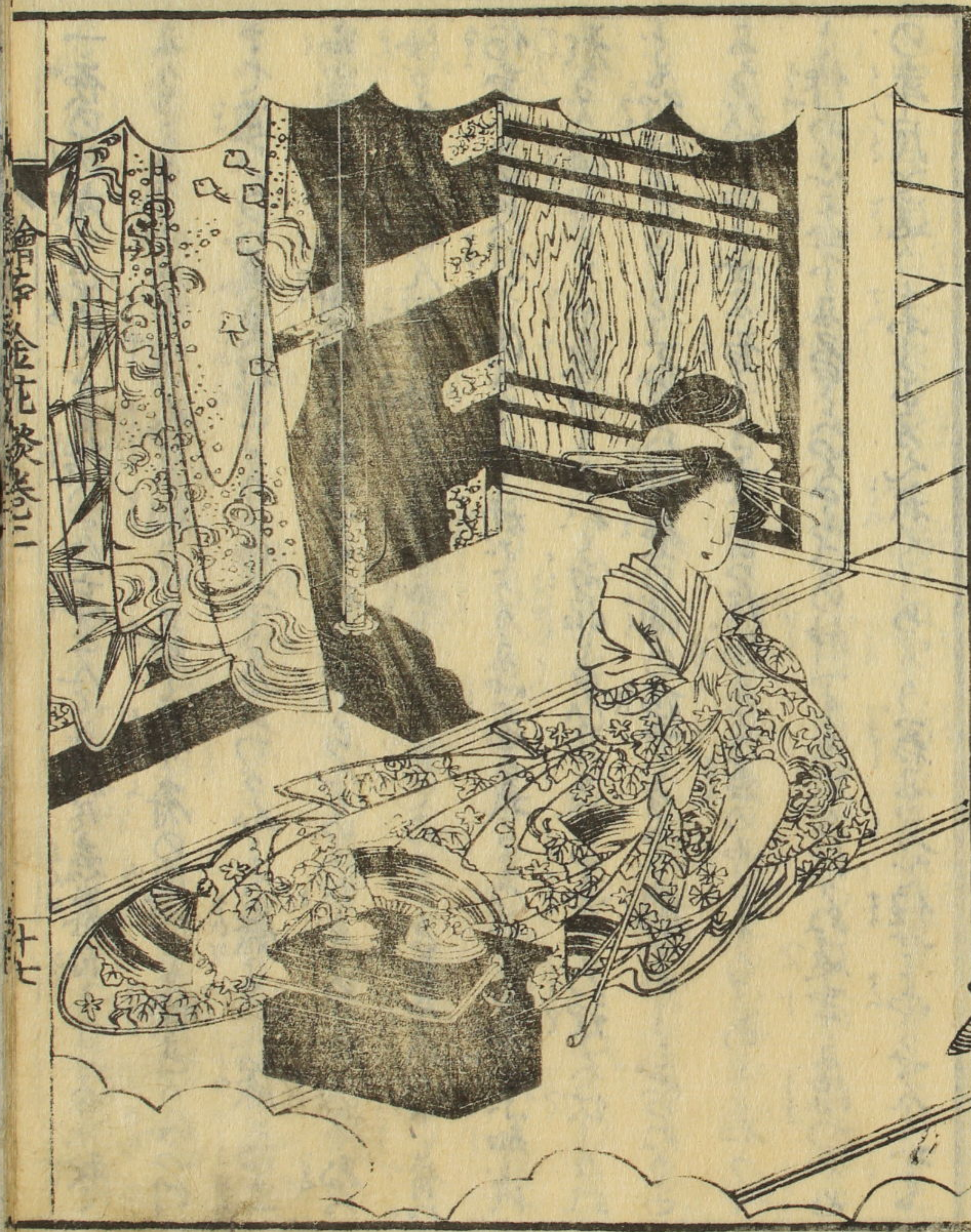
繪本
金
卷

石出さし河例みさし一垂さしたまふり。近年おつさし飲み米穀豊
 登らば諸士の徳知さしうく減せむおつさし米穀の清養と
 厭せむ。國民法士と懐ませる。市仁恵とすのんをよとせし清養え
 空一努力。お十弁るも兼り。おむりのは行状と懐ませる。飲むと懐
 せんおも致しうく。何とも満時のは行状と懐ませむ。性目のは仁直
 小成らせむひる。おは皆又悦み極むを介とせむ。とを和らふ小徳人のま
 ところ。さも英作も懐めむ。とを厚もその尾目つと。惟今才系が通る。市
 区下のさめ共叔父とて。おもを地結し。在るは区下の下風。お身分なり
 仍快しう。さるる。幕府一統の風説とる。自徳上の清徳等。お時ち
 市徳とる。さ下のお考が。又對し。て。面對し。て。さ。り。て。区下の老臣等
 も。後指さく。予と雪り。懐とせむ。お何の憚あらんや。と。厚こそ。友働が

面とせむ。お。懐も加さう。さ。り。て。人。の。能。懐。と。兼。り。て。区。下。一。人。の
 心。働。と。兼。り。て。縁。老。と。て。且。塵。と。兼。り。て。さ。り。て。中。興。の。徳。と。兼。り。て。秀。徳
 是。祖。對。し。何。や。の。不。孝。と。や。此。事。へ。来。り。た。ら。も。聖。賢。の。書。小。眼。を。觸
 ら。是。徳。と。自。治。の。心。と。兼。り。て。徳。と。兼。り。て。著。も。何。の。科。の。心。と。兼。り。て。事。あり。
 早。者。区。下。の。若。氣。が。致。知。致。何。か。才。系。が。有。兼。り。た。ら。は。後。の。身。徳。と
 改。め。ら。は。さ。し。此。事。此。後。の。心。と。兼。り。て。お。又。是。れ。と。願。ら。は。さ。り。て。對。し。國。之。中。を
 一。供。老。も。藝。と。お。後。し。け。り。て。相。思。も。お。と。若。り。切。て。や。り。て。さ。り。て。
 友。働。を。ら。お。さ。し。お。も。流。し。懐。徳。の。人。が。し。も。懐。り。て。照。し。の。心。は。さ。し。厚。も
 ひ。り。ひ。の。さ。し。ひ。り。の。作。の。徳。と。兼。り。て。さ。り。て。兼。伏。は。さ。し。の。心。と。兼。り。て。
 己。身。在。里。の。通。ひ。と。お。止。放。蕩。情。懐。堅。く。お。慎。り。て。資。を。さ。し。此。事。國。之。中
 作。つ。さ。り。事。さ。り。し。又。才。系。が。知。乃。知。あり。惟。今。去。處。若。り。通。り。は。後

花里の通ひお輾べしと快くやうしつゝを座敷も収束の色を脱ぐ
 子迷兼子の有よりこふは終裁すこ安場しつゝ才原も其は飛
 返り遊遊しつゝ直のP条は寛容下しとるは腹有つた湯恩を
 軽く其れと去みたる是より友徳道程とや思ひ又と日へ花里の通ひ
 も止みたる才原竊は後約綾川奸賊は爪指さ何とぞ此う今一匹の車
 るれは意らば度ゆゑ花里一誘へて遠隔くみしうり車と由せよと
 中々に奸賊の辺長子の針と交友働も中々に唯今中を九つ様りも
 多るよんは是をせむひ渠鉄石の女ありとも今を解く心もまごご
 して時節を交りて意りかへた七化と水も浴をととす程に此後ら
 才原が存せざる痛僅も又六人の沙汰よく涙も及んて山出有給不致し
 と。さあが車ももとを角角。其の夜兼もえの味も此くPせしなと

さあぐりませうく再ひなうとたえ本その艶色も感さよる山折かろ
 こふは悲ひやうみり下つとあるは綾川朝夜中々の君の山伏がることをん付
 都舎の裏の路次の宿籠等育ては後悔とともなすまじはつて世間も
 面と知らしつゝのりのと世世作せ付らることを宜しうんとその日のあふ
 石のうまれつゝ荒海因る助雷越雲たあると相撲をありそのあふ人々
 取らふし涙もあふび後門より悲ひ出た廓とつて絶たひぬる後ら
 毎夜七人の辺習と連忠ひやうも通ひゆくと世上げ二人とて知るる若ら
 ふうりたる日分思ひ月と後で具本程さうく且翌の二月小成さうも
 一茶も潮どきさうりともりよりひおみふは捨に後ひ平鄙も生るこく
 だ一國の守りあり故う艶なる容姿も恋をよのまよりのぬふいさませ二年
 及びび一夜もさらば通へ本石といふも一長の情のあふまふまふさうらひく

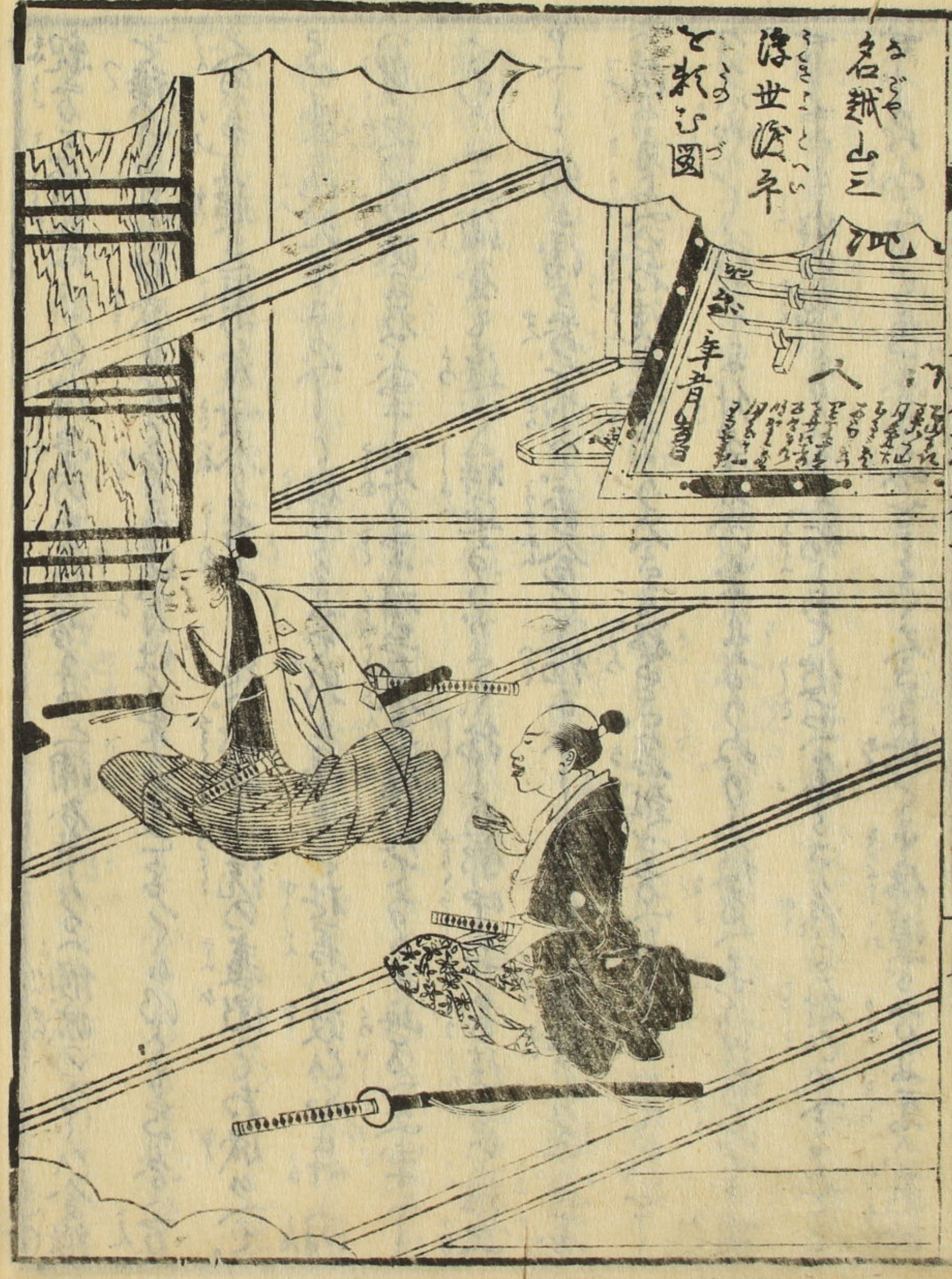
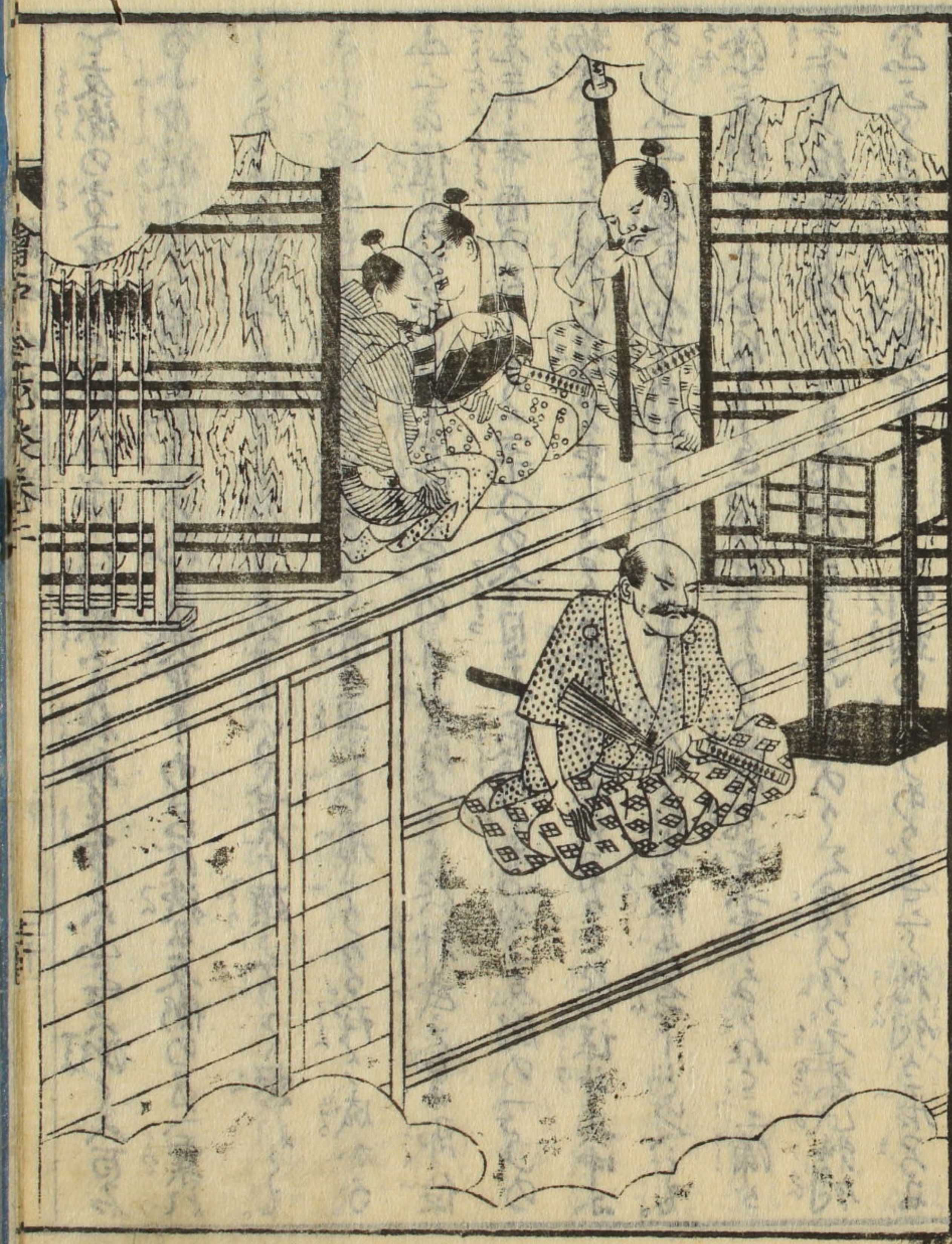


名取山三ふ
 身結瓜
 去るま
 去るま
 去るま



一夜の枕席も愛とて結ばるる志もなされた意慕目くむる夜
 みるこころ。今上世の人には解りて慕ふ幕府の風情も頼まり海の内
 中を通ひるる真実なりとていふ。今上つづも藤原上
 皇もさうく後醍醐のいふとぬせむ人さびぐらんといふ古舟のこころも
 海もあか解ん但し海もあか解るるも背ての事も若年の事も背の
 何事も依りて得る事とて初むりもいふも我もろとて無下不知
 顔の振ひもそそ悪りくたれお品もいふべきも乃理も休られ
 ともははまるところの須磨の浦の塩やくつう風をあはれむる
 みるびくやと世も若くも事なる何事も若のやとそこのこころ
 と作の事無下も若くもいふの沖も若くも返すも浮つとも
 の年月と送りも若くも若くも我もいふりう。若も若と任せも若も若も

まがどこの年月一夜の寝も寝たあまの侍も唯連るるやそとそ
 て見る角やせとて扱を若の方より。後通ひ路もあひるのこころ此
 より通ひのいふも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも
 とぬる。向後には通ひをやらむらうとてそ後あてからいふたうつとて
 友衛軍のいふも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも
 後通ひも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも
 ともしも容身も若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも
 の此も若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも
 なるもこの方いふも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも
 とふたも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも
 何と愛のゆふも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも若くも



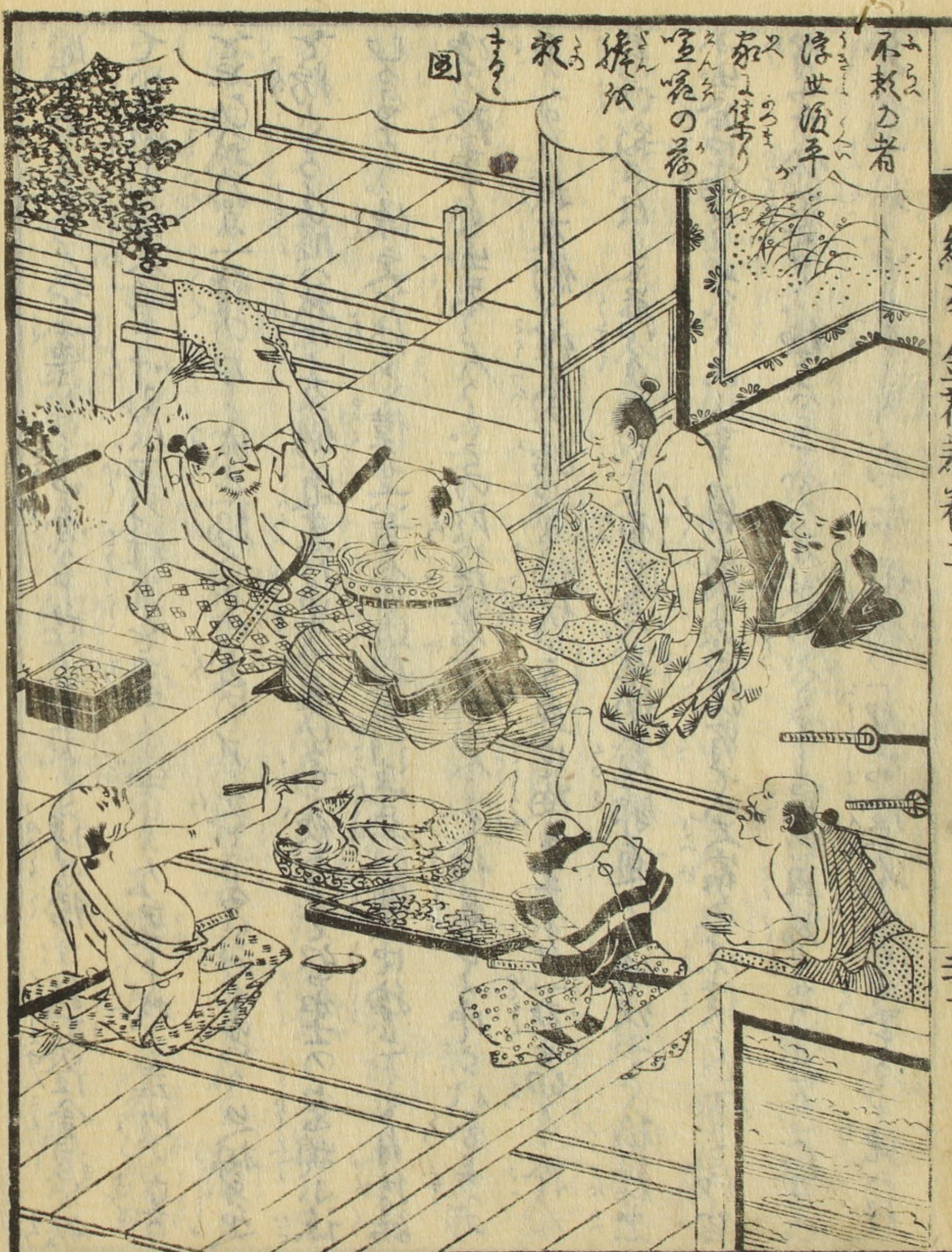
名越山三
 浮世伝平
 とおのこ

糸本金持初巻三

十九

と友樹の方をいへば我と汝が申すは條々然知よと云ふと漸く二百石
 の小舟彼方の大國の至金銀のなる張合事ありは後友樹の亦棄れ
 してありては恥辱これより大じらるるべしとせんて躍より怒れども
 して躍出とて金銀の才をうく忙果てを居りける程に成かか
 山ころ億も二百石の舟上大膳を舟の上にはつとたは神武天皇即位
 元年辛酉のころより二千石の今日中七取替てもある友樹の二つもの
 物成り及んで笑ひも堪へる事たり。昔もなれは利りとなはは縁斗其申ふ
 めり。山ころ忽ち申す計を生しとある向ひは金銀もいへといふとも
 汝と友樹のうをばすといふ計事あり。必は有き事ありと云ふ。二浦が
 えよう狂やいぬらうけは格別七つと云ふ老のうをばすは格別
 山ころ兄の念をきくとも別頭の変りあり。山ころ格別が居るは

通りわづらの人を遠げ。あるがやせし事とも詳も格別。我も金銀の
 てい友樹と張合事計は二つの計事を棄て申す。是下我も計事の交り
 と云ひ我も一臂の力と成り候う。この交の才をいへてありは格別
 と傍ぐるは腹に我の友樹近來在里の通ひ毎夜をりて取合士の常煩小味
 ひらり。休まをばすも億も六七人の辺後と引連れ通ひ申す。月夜路
 次の取事も出来ん。この取は從者十二人をして往來するに。これ各々の
 美らり。我友樹が往來の路次は侍たり。是は海軍中。せ一刀切。捨ん
 切切殺さるるも存り。さくも負せらば友樹は廓通ひの路次も格別
 小出入は海軍中。さくといふ事幕府は沙汰有ては家の法使といふも格別
 有事必定なり。後さくも存り。さくも負せらば友樹は廓通ひの路次も格別
 介人十計の存り。山ころ微着の一身不詮一人と云ふ事あり。他は



不救の者
浮世浪平
又々集
空の病
猿
救
ま
回

繪本金瓶梅卷三

三

足下と力を加ふべしと終つて、（中略）と思ひ入つておぼむ。
 猶何れも、（中略）の倭奸一、（中略）の若むのふらぬ。
 我汝が、（中略）の用也。されども、（中略）の十二人、（中略）の僕もあつた。
 我家の奴僕等、（中略）の人も用ひ、（中略）の又切つて、（中略）の二を、（中略）の鬼めた。
 友徳と、（中略）の縁も、（中略）のあつた。されども、（中略）の親も、（中略）のあつた。
 と、（中略）の友徳と、（中略）の対得、（中略）のとも、（中略）のあつた。
 渠と、（中略）の殺害、（中略）の此方の、（中略）の去、（中略）の計、（中略）のあつた。
 男が、（中略）の名、（中略）の浮世、（中略）の浪平、（中略）のこの、（中略）の若、（中略）の諸侯、（中略）のあつた。
 今、（中略）の如、（中略）の余の、（中略）の地、（中略）のあつた。
 の中、（中略）のとも、（中略）の避、（中略）の若、（中略）のあつた。
 引、（中略）のさ、（中略）の象、（中略）のあつた。

浪平が、（中略）の門、（中略）のあつた。
 渠が、（中略）の案、（中略）のあつた。
 と、（中略）の止、（中略）のあつた。
 浪平が、（中略）のあつた。
 それと、（中略）のあつた。
 浪平と、（中略）のあつた。
 且、（中略）のあつた。
 て、（中略）のあつた。
 且、（中略）のあつた。
 進、（中略）のあつた。

徳川金匱書

三

縁は生舞へてふとて、疆豪なる歌りちあぐ。兼く精何と入る。況も
 よろく。貴君の事へ兼り及ぶとて、因縁落す。お面は、
 未だ若のそとと敷うんとて、精何中を執り、
 山道の東道と成り、
 一盞と各り、
 今午、
 若きらく下り、
 上る。盞の後、
 のひ下、
 眉と聲り、

たる事、
 らば、
 ある中、
 大膳、
 が方、
 事と、
 と、
 の、
 へ、
 上、
 う、

其基石緒ひの味情も、義洋園を運来し、くも、劍戈の輝と見て、脈
 下みむるたのたのの月より幸に、その由、里下の業、徹意でねる
 う。然とて、やせの火とも、避るる、嘉儀、何とて、要るを、ねんで、後備とい
 友、御と、は、福を、は、け、る、を、我、ら、に、力、を、と、情、を、来、し、て、助、力、下、さ、さ
 る、あ、人、も、一、代、清、を、圖、を、志、す、ま、ま、と、い、ふ、處、り、て、り、て、や、り、ま、さ、る
 後、平、哥、と、い、ひ、こ、い、は、れ、た、は、た、た、と、い、ふ、先、刻、の、由、を、よ
 大、事、と、お、し、作、り、し、り、中、の、後、の、事、を、う、い、ふ、余、は、胸、と、地、を、居、ひ、ひ、し、ぬ
 ま、り、は、痛、痛、痛、を、う、い、ふ、極、め、り、て、り、ま、さ、り、と、い、ふ、又、膝、を、居、る、の、廓、通
 ひ、の、事、を、う、い、ふ、け、り、と、い、ふ、及、び、お、け、り、と、い、ふ、減、り、と、い、ふ、代、り、の、諸、次、用、を、い、ふ、あ
 り、相、撲、取、あ、り、と、い、ふ、運、通、下、の、風、を、赤、標、を、う、い、ふ、角、力、と、い、ふ、時、力、を、い、ふ、
 出、た、り、た、又、又、死、生、を、う、い、ふ、血、の、場、を、出、し、と、い、ふ、七、膽、の、頭、を、我、を、吃、と、い、ふ、



青、息、も、成、り、居、る、を、お、か、さ、る、下、の、海、江、の、中、へ、獲、り、と、い、ふ、黒、く、黒、く、と、い、ふ、未、曉、に、お、か
 人、か、さ、る、に、橋、を、し、り、と、い、ふ、け、り、と、い、ふ、獄、場、の、芝、居、を、居、る、の、劍、を、居、る、の、下
 余、た、ま、し、と、い、ふ、の、外、の、御、中、官、邸、に、一、年、二、百、六、十、日、を、二、百、六、十、日、を、い、は、り、と、い、ふ、
 かり、と、い、ふ、國、の、大、名、相、を、と、い、ふ、お、か、さ、る、と、い、ふ、今、日、を、と、い、ふ、と、い、ふ、これ、お、か、さ、る、
 名、刺、を、竹、の、と、い、ふ、中、の、の、と、い、ふ、お、か、さ、る、の、ぬ、た、り、と、い、ふ、小、舟、を、と、い、ふ、在、り、と、い、ふ、
 通、方、と、い、ふ、後、平、の、居、人、を、居、る、と、い、ふ、の、ぬ、た、り、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、
 何、れ、と、い、ふ、お、か、さ、る、と、い、ふ、進、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、
 提、下、の、男、を、居、る、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、
 ら、と、い、ふ、お、か、さ、る、と、い、ふ、お、か、さ、る、と、い、ふ、居、侍、の、居、人、を、居、る、と、い、ふ、生、活、勤、勉、の、を、切、り、と、い、ふ、
 多、く、と、い、ふ、お、か、さ、る、と、い、ふ、七、八、人、の、お、か、さ、る、と、い、ふ、お、か、さ、る、と、い、ふ、お、か、さ、る、と、い、ふ、
 十、余、人、の、お、か、さ、る、と、い、ふ、門、の、會、を、お、か、さ、る、と、い、ふ、お、か、さ、る、と、い、ふ、お、か、さ、る、と、い、ふ、

町 富 福
市 兼 大 郎
三 丁 目

繪本金枝義卷三

さげしむ花たる七と弟らにさまひも同じ目と見え合は海一とありてなゆ教を
し海平さあまを叩ねるおひのかりるは洋空を候を極はさうとぬらさ
異科の刀を敵く海平さあまを古ひ内及兼末とあまも此腰の物へせん祖
りお持ちさあまの出来の敵を戰場と輝るる具へはたの強さを進上
はるる船がたれさあまさうりけりたは合さうし出さる海平さあまがさう
一合ははるる危はるは強の物への強運りさあまもさうり物まを運るた
さうさうりとさうりさあまもさうり各國後討を極く強さあまをさうりさうり



繪本金枝義卷之三終



